

と思いがあってしまってもいけませんね。布施ということひとつでも、かなり難しいことです。

他の六波羅蜜も、形だけなら修められるかもしれませんが、本当の意味で修めて行くのは大変に難しいです。

◇浄土真宗の阿弥陀さま

六波羅蜜などの善行を実践した方がよいのは、大乘仏教徒として間違いないことです。

でも、どんなに素晴らしい行でも、それができなかったとしたら私にとつては意味がありません。修行ができない私は彼岸(さとりの世界)に行くことができないのでしょうか？

いえ、そんなことはありません。

阿弥陀様という仏さまは、善行をやり通すことができない私を良く「存知の仏さま」です。そして、自ら彼岸に至れない私が居るからこそ、そんな私を彼岸に渡さずにはおれないと、自らが悟りの世界への渡し船になってくださったのです。

◇浄土真宗の彼岸

浄土真宗で「彼岸」と言うときには、彼岸はお浄土のことを指します。即ち、西の彼方に建立された西方極楽浄土こそが、私たちにとつての「彼岸」なのです。

西の彼方と言ってしまうと何やら物凄く遠いように感じられるかもしれませんが

が、お経には「阿弥陀仏、此をさきと遠からず」と説かれています。

お念仏をいたさながら、お浄土に生まれて行く命だと知らされて、自分自身を見つめていく人生を歩んでいる人にとつては、お浄土も阿弥陀さまも今ここに働いてくださっている存在なのです。



西方極楽浄土の阿弥陀如来

◇彼岸の時期

お彼岸は年に二回、春と秋にありますよね。しかも毎年微妙に日が違います。それは何故なのでしょう？

お彼岸は春分の日と秋分の日を中日として、その前後三日間、合わせて七日間を指します。最初の日を「彼岸の入り」最後の日を「彼岸明け」と言われます。

この中日である春分の日と秋分の日、太陽が真東から登って真西に沈んでいく日です。そのタイミングが毎年少し違うので、お彼岸の時期も毎年少し違うのです。

ちなみに、祝日法という法律では、春分の日は「自然をたたえ、生物をいつくしむ」日、秋分の日「祖先をうやまい

なくなつた人々をしのぶ」日となっています。法律で「先祖様を偲ぶ日」と決められているなんて面白いですね。

令和五年のお彼岸日程

春のお彼岸

三月十八日(入り)

十九日

二十日

(春分の日)

二十一日

二十二日

二十四日(明け)

秋のお彼岸

九月二十日(入り)

二十一日

二十二日

(秋分の日)

二十三日(中日)

二十四日

二十五日

二十六日

◇ぼた餅とおはぎ

お彼岸には「ぼた餅」や「おはぎ」を作り、先祖様にお供えます。

ちなみに、ぼた餅とおはぎの違いを知っていますか？実は違いはないのです。

ぼた餅もおはぎも同じ物なのです。春は牡丹が咲くからぼた餅、秋は萩が咲くからおはぎ(お萩)なんです。



(牡丹の花)



(萩の花)



◇お彼岸の過ごし方

さて、色々書いてきましたが、お彼

岸の期間ってどう過ごせば良いんでしょうか？

実は、浄土真宗では「どう過ごしたか」といけなさい」という決まりはありません。しかし、折角一年に二回しかないお彼岸ですし、全ての命を育んでくれる太陽が西方極楽浄土の方向へ沈んでいく日ですから、大切に過ごしたいものです。真西に沈んでいく夕日を見ながら、いつか私も光り輝く夕焼けの向こうにあるという浄土へまいらせていただきます、と真西に手を合わせ、南無阿弥陀佛とお念仏いただくとうのも良いのではないのでしょうか。

科学的に考えれば、太陽の周りを地球が回っていて、年に二回、地球から見て太陽が真西に沈んでいるように見えるだけ、と考えることもできるでしょう。その見方だけでは人生ちつとも味わい深いものにはなりませんね。

同じ夕焼を見ている「ああ、太陽がお浄土へとかえっていった。懐かしいあの人も、きっとあの光り輝くお浄土におられて、今も私を見守ってくださるんだなあ。南無阿弥陀仏」とお念仏をありがたきだけけるのが、仏教徒の素晴らしいところじゃないでしょうか。

また、祝日で学校などが休みですし、半年に一度、お墓を綺麗にし花をあげ家族でお参りす日と決めておくのも良いかもしれませんね。